

使徒の働き8章26-40節 「イエスを伝道する」

1A 主の召し 26-28

2A 御霊の導き 29-30

3A 預言書にある証言 31-35

4A 水のバプテスマ 36-39

5A 伝道者ピリポ 40

本文

使徒の働き8章を開いてください。私たちの聖書通読の学びは、使徒の働き 7 章まで来ました。午後礼拝で、8 章全体を一節ずつ学びます。今朝は、最後の 26 節から 40 節までに注目したいと思います。まず、一気に読んでみましょう。

「²⁶ さて、主の使いがピリポに言った。「立って南へ行き、エルサレムからガザに下る道に出なさい。」そこは荒野である。²⁷ そこで、ピリポは立って出かけた。すると見よ。そこに、エチオピア人の女王カンダケの高官で、女王の全財産を管理していた宦官のエチオピア人がいた。彼は礼拝のためエルサレムに上り、²⁸ 帰る途中であった。彼は馬車に乗って、預言者イザヤの書を読んでいた。²⁹ 御霊がピリポに「近寄って、あの馬車と一緒に行きなさい」と言われた。³⁰ そこでピリポが走って行くと、預言者イザヤの書を読んでいるのが聞こえたので、「あなたは、読んでいることが分かりますか」と言った。³¹ するとその人は、「導いてくれる人がいなければ、どうして分かるでしょうか」と答えた。そして、馬車に乗って一緒に座るよう、ピリポに頼んだ。³² 彼が読んでいた聖書の箇所には、こうあった。「屠り場に引かれて行く羊のように、毛を刈る者の前で黙っている子羊のように、彼は口を開かない。³³ 彼は卑しめられ、さばきは行われなかった。彼の時代のことを、だれが語れるだろう。彼のいのちは地上から取り去られたのである。」³⁴ 宦官はピリポに向かって言った。「お尋ねしますが、預言者はだれについてこう言っているのですか。自分についてですか。それとも、だれかほかの人についてですか。」³⁵ ピリポは口を開き、この聖書の箇所から始めて、イエスの福音を彼に伝えた。³⁶ 道を進んで行くうちに、水のある場所にきたので、宦官は言った。「見てください。水があります。私がバプテスマを受けるのに、何か妨げがあるでしょうか。」³⁸ そして、馬車を止めるように命じた。ピリポと宦官は二人とも水の中に降りて行き、ピリポが宦官にバプテスマを授けた。³⁹ 二人が水から上がって来たとき、主の霊がピリポを連れ去られた。宦官はもはやピリポを見ることはなかったが、喜びながら帰って行った。⁴⁰ それからピリポはアゾトに現れた。そして、すべての町を通過して福音を宣べ伝え、カイサリアに行った。」今朝の鍵になる言葉は、「伝える」とか、「宣べ伝える」という言葉です。

ここに出てくるピリポは、エルサレムの教会で、食卓に仕える奉仕者として選ばれた七人のうち

の一人です。そのうちの一人ステパノについて、前回、彼が殉教したところを読みました。この殉教によってエルサレムの教会に激しい迫害が起こり、人々は、散らされていきました。ところが、彼らは、「みことばの福音を伝えながら巡り歩いた。」とあります(4 節)。イエスの教えに対して激しく反対したことによって、かえって福音が、周囲のユダヤとサマリアの地域に広がったのです。サマリアの町に広げたのが、ピリポです。5 節に、「ピリポはサマリアの町に行き、人々にキリストを宣べ伝えた。」とあります。キリストご自身を伝えました。そして、多くの人々が信じて、水のバプテスマを受けました。その後で、エルサレムからペテロとヨハネがやって来て、人々のために祈り、手を置くと、彼らに聖霊が与えられました。サマリアの町で霊的な覚醒、信仰の覚醒が起こりました。このことは午後礼拝で見えていきます。

1A 主の召し 26-28

このような著しい、御霊の働きがある中で、主の使いが命じます。

26 さて、主の使いがピリポに言った。「立って南へ行き、エルサレムからガザに下る道に出なさい。」そこは荒野である。

著者ルカは、わざわざ「そこは荒野である。」という注釈を入れています。まず、サマリアの町を離れ、エルサレムに行きます。そしてエルサレムから約 80 ㎞のところ、ガザに至る道があります。ガザは、ニュースにも出てくるあのガザ地区のガザです。ペリシテ人の町の一つであったところで、紀元前 93 年に破壊された後、紀元前 57 年には再建されています。ローマ時代は栄えていましたが、そこは、南、エジプトやアフリカに行く道でもありました。ペリシテの平野にある海岸の町ですが、南に下ればシナイ半島に入り、シュルの荒野という沙漠の地域になります。そういった乾燥したところであり、ピリポは荒野の方に行きなさいと命じられるのです。非常にすばらしい御霊の働き、人々が喜んで福音を信じ、受け入れて行ったところにいたのに、突如として、何もない荒野の道に行きなさいと命じられるのです。

ここで必要なのは、主の召しに应答して、不従順にならないということです。たとえ理解できなくとも、従うということです。思い出すが、カルバリーチャペルの始まりです。チャック・スミスは、フォースクウェアという教団で、長いこと牧会をしていました。教会もいろいろと変わっていききました。なかなか人が集まらない中で、コロナという町での教会はとても祝福され、人も増えて行ったそうです。ところが、コスタメサの町にあるカルバリーチャペルという教会は、20 名ぐらいしかいなかったのでしょうか、牧師を招聘できなければ閉じるつもりだったのだそうです。チャックは祈りました、それで、その教会の牧会を始めたのです。信じられなかったのは奥さんのケイです。主人が、気がおかしくなったのか？と思い、カウンセラーのところに行きなさいというのでチャックは行ったそうです。ある時、チャックが家に戻ると、ケイが玄関で泣いていました。どうしたのか？と尋ねると、「主に語られた。」というのです。夫に従いなさい、と。けれども、感情も理解も全くついて来ること

ができなかったそうです。けれども、そう命じられたのだから、それだけの理由で新たな教会に赴任したとのこと。それが、ヒッピーたちが次々と主を信じていく、アメリカにおける教会の大覚醒、イエス革命になるとは夢にも思っていませんでした。

ソロモンがこのように箴言で話しました、「3:5-6 心を尽くして主に拠り頼め。自分の悟りに頼るな。あなたの行く道すべてにおいて、主を知れ。主があなたの進む道をまっすぐにされる。」主が召され、導かれる時には、私たちの理解や知性との葛藤があります。どうしても理屈に合わないのです。けれども、主が言われたからということだけで従うのです。

27 そこで、ピリポは立って出かけた。すると見よ。そこに、エチオピア人の女王カンダケの高官で、女王の全財産を管理していた宦官のエチオピア人がいた。彼は礼拝のためエルサレムに上り、²⁸ 帰る途中であった。彼は馬車に乗って、預言者イザヤの書を読んでいた。

ピリポが従順になって立って出かけると、「**すると見よ。**」とルカは記しています。彼が伝道することにある、エチオピア人の宦官がその道を通って、馬車に乗っていました。このように信仰によって一歩踏み出すと、次の道を示されます。私たちは、神に、「あなたのご計画の全体を始めに示してください。そうしたら従いますから。」と言ってしまいます。しかし主は、ご自分により頼んで生きてほしいと願われているので、その従順を試すために、一歩ずつ先を示されます。暗闇の中で灯を持っているように、ずっと先は見せませんが、主の示された一歩先は見えるようにされるのです。

「**エチオピア人**」ですが、旧約聖書では「クシュ」という名で出てくる国です。今のエチオピアという国がありますが、当時は、エジプト南部からスーダンに広がる国でした。感動したのは、今のスーダンにカルバリーチャペルがあるのですが、「カルバリーチャペル・クシュ」という名前だったのです。恰好良すぎます！彼はなんと、女王に仕えるエチオピアの高官でした。そして、去勢をしている宦官でもありました。けれども、「**礼拝のためエルサレムに上り**」とありますから、彼は改宗したユダヤ教徒だったのではないか？と思われる。ユダヤ人ではないけれども、ユダヤ教に改宗した人です。

ところで、今のイスラエルに行くと、黒人のユダヤ人たちも多くなります。彼らは、「エチオピア系ユダヤ人」です。エチオピアには代々、ユダヤ教が受け継がれてきました。その言い伝えによれば、シェバの女王がソロモン王を謁見しましたが、「**シェバの女王が求めたものは何でもその望みのままに与えた。(I列王 10:13)**」とありますが、その望みの一つがソロモンの子孫を作ることです。シェバ女王が妊娠して、ソロモンの子が生まれ、それで我々がその子孫であるとして、エチオピア系ユダヤ人がいます。この宦官は、そのような人の一人であったかもしれません。

女王に仕えていたので、かなりの高い地位の高官です。馬車に乗っていました。そして、預言者

イザヤの書を読んでいました。改宗して、エルサレムに礼拝に行ったのですから、霊的な飢え渴きが強く、求道していたのでしょう。礼拝に行ったものの、まだ分からない点が多く、心が満たされていたとは言えません。しかし、主はそういった求める人々に現れてくださいます。後に、カイサリアでローマの百人隊長コルネリウスに御使いが現れて、「10:4 あなたの祈りと施しは神の御前に上って、覚えられています。」とあります。彼も神を求めていました。主は、求める心に必ず答えて下さり、そのために、エチオピア人の宦官が福音を聞くために、ピリポを遣わして下さったのです。

2A 御霊の導き 29-30

29 御霊がピリポに「近寄って、あの馬車と一緒に行きなさい」と言われた。³⁰ そこでピリポが走って行くと、預言者イザヤの書を読んでいるのが聞こえたので、「あなたは、読んでいることが分かりませんか」と言った。

ピリポに対して、主の使いが命じて、彼はここまで来ましたが、今度は御霊ご自身が、エチオピア人の宦官のところと一緒に行きなさいと命じられます。人に話しかけるということ、これは結構、勇気が要ります。誰かのところに伝道のために行ったのに、いざ、その場にいると、なんと話しかけなかったということは十分あります。けれども、話しかけてみることで初めて、伝えることができます。イエス様がサマリアを通られた時に、スカルのところにある井戸のかたわらに座り、水を汲みにやってきた女に話しかけました。「ヨハネ 4:7 わたしに水を飲ませてください。」と言われたのです。とても簡単な一言ですが、実はとても難しい一言でした。ユダヤ人の男性が、サマリア人の女性に話しかけるのはまずありえません。それで女もなぜサマリアの女の私に飲み水を求めるのか？と逆に聞いています。このように、怪訝な反応をされることは十分にありえます。だから語りかけるのが難しい。けれども、御霊による促し、その導きに思い切って従うことが必要です。

3A 預言書にある証言 31-35

31するとその人は、「導いてくれる人がいなければ、どうして分かるでしょうか」と答えた。そして、馬車に乗って一緒に座るよう、ピリポに頼んだ。³² 彼が読んでいた聖書の箇所には、こうあった。「屠り場に引かれて行く羊のように、毛を刈る者の前で黙っている子羊のように、彼は口を開かない。³³ 彼は卑しめられ、さばきは行われなかった。彼の時代のことを、だれが語れるだろう。彼のいのちは地上から取り去られたのである。」³⁴ 宦官はピリポに向かって言った。「お尋ねしますが、預言者はだれについてこう言っているのですか。自分についてですか。それとも、だれかほかの人についてですか。」³⁵ ピリポは口を開き、この聖書の箇所から始めて、イエスの福音を彼に伝えた。

宦官がいかに熱意を持っているかが、彼の方から馬車と一緒に座るよう頼んでいるところから分かります。それで、その巻物をピリポが覗くと、イザヤ書 53 章の箇所でした。それが、誰について語っているのか、イザヤ本人なのか、他の人について話しているのかを尋ねています。それで、

ピリポはためらうことなく、「この聖書の箇所から始めて、イエスの福音を彼に伝えた。」とあります。他の話題について話しませんでした、その与えられた箇所からイエスの福音を伝えたのです。

宣べ伝える、また伝えるとは、イエス様を伝えるのです。主ご自身が、サマリアの女に話しかけた時に、目の前にある井戸の自ら、ご自分にいのちの水がある、永遠のいのちがあることを伝えられました。女は、サマリア人とユダヤ人の確執について何度となく話題を取り上げましたが、イエス様はその度に、どちらでもなく、霊とまことをもって神を礼拝する時が来るとして、ご自身がメシアなのだというのを、女が知ることができるようになりました。他にもいろいろなことを話せたでしょう、けれども主は、ご自分のことを伝えること以外はしませんでした。同じようにピリポは、イエスの福音を、彼の持っていた聖書の箇所から語ったのです。パウロはこう言いました、「Ⅱコリ 4:5 私たちは自分自身を宣べ伝えているのではなく、主なるイエス・キリストを宣べ伝えています。私たち自身は、イエスのためにあなたがたに仕えるしもべなのです。」

そして、預言書そのものが、イエス様を証しています。「ヨハ 5:39 あなたがたは、聖書の中に永遠のいのちがあると思って、聖書を調べています。その聖書は、わたしについて証しているのです。」そして、黙示録では御使いがヨハネに対して、こう語っています。「黙 19:10 私は御使いの足もとにひれ伏して、礼拝しようとした。すると、御使いは私に言った。「いけません。私はあなたや、イエスの証しを堅く保っている、あなたの兄弟たちと同じしもべです。神を礼拝しなさい。イエスの証しは預言の霊なのです。」御使いの栄光がすごいので、ヨハネは礼拝してしまいそうになりました。御使いが強く戒め、神のみを拝しなさいと言います。それから、イエスの証しは預言の霊なのだと言っています。預言者が御霊によって語る時に、それはイエスのことを証している、ということなのです。イエス様ご自身が、復活された後に、エマオの途上にいた二人の弟子に、聖書全体からご自分について書かれていることを説き明かされました。

そして、ここのイザヤの預言ですが、「屠り場に引かれて行く羊のように、毛を刈る者の前で黙っている子羊のように、彼は口を開かない。」というのは、主がユダヤ人の指導者たちに訴えられているのに、一切お答えにならなかったところで成就しています。「マタ 27:12-14 しかし、祭司長たちや長老たちが訴えている間は、何もお答えにならなかった。そのとき、ピラトはイエスに言った。「あんなにも、あなたに不利な証言をしているのが聞こえないのか。」それでもイエスは、どのような訴えに対しても一言もお答えにならなかった。それには総督も非常に驚いた。」そして、「彼は卑しめられ、さばきは行われなかった。」という言葉は、主に罪がないと総督ピラトは分かっていたのに、それでも十字架刑に処したというところで、実現しました。そして、「彼の時代のことを、だれが語れるだろう。彼のいのちは地上から取り去られたのである。」とありますが、この方が死なれました。いのちの君が死なれたという衝撃的なことですが、それがイエスにあって実現したのです。

こういったことをピリポは、エチオピアの宦官に話したことでしょう。それで、イエス様が自分自身

に明らかにされていったことでしょう。御霊の導きもあるので、十字架につけられたキリストがはっきりと見て取れたのではないかとと思います。これが、イエスの福音を伝えるということです。

4A 水のバプテスマ 36-39

³⁶ 道を進んで行くうちに、水のある場所に来たので、宦官は言った。「見てください。水があります。私がバプテスマを受けるのに、何か妨げがあるでしょうか。」³⁸ そして、馬車を止めるように命じた。ピリポと宦官は二人とも水の中に降りて行き、ピリポが宦官にバプテスマを受けた。

ここには、37 節が抜けていますね。下の引照部分を見てください。「そこでピリポは言った。『もしあなたが心底から信じるならば、よいのです。』すると彼は答えて言った。『私は、イエス・キリストが神の御子であることを信じます。』」ピリポは、イエス様が語られた、「マル 16:16 信じてバプテスマを受ける者は救われます。信じない者は罪に定められます。」ということも、語ったのだと思います。信じるということは、行動に移すことです。知的に信条に同意することだけでなく、イエスという方に全き信頼を寄せ、自分自身をゆだねることです。この方の死とよみがえりに自分を一体化させることです。ですから、信じて、その信じたことを目で見える形で表すために、バプテスマを受けます。このことを聞いて、エチオピアの宦官のほうから、「見てください。水があります。私がバプテスマを受けるのに、何か妨げがあるでしょうか。」と尋ねています。彼が、喜んでいる様子が伝わってきますね。

ここで大事なのは、バプテスマを受けることが信じているという事実だけで行動に移していることです。私たちは新しい信者の学びをしていますが、それを行ったら初めてバプテスマを受けられるということではありません。信じてバプテスマを受けるのです。これだけ単純なのです。イエス様を人に伝えるということは、これだけ単純なのだということです。簡単だという意味ではありません、大きな決断ですし、人にはプライドがありますから、その一歩を踏むのをためらいます。けれども、信じる時にはそのまま行動に移すのです。この単純性を濁らせてはいけません。

荒野だったのですが、時期が雨季だったのでしょう。あるいは春でも後の雨が降っていた時なのでしょう、沙漠の地域でも何度か、雨が降ります。その時に、涸れている川に水が流れます。それを見つけたのでしょう。そして二人で水の中に入ります。バプテスマには、滴礼というものはありませんでした。頭に数滴振りかけて、それを洗礼と呼ぶことができますが、聖書ではすべてが浸礼です。全身が浸かるものです。

³⁹ 二人が水から上がって来たとき、主の霊がピリポを連れ去られた。宦官はもはやピリポを見ることはなかったが、喜びながら帰って行った。

非常に興味深い現象が起こりました。ピリポが、御霊によって瞬間移動したのです！このような

御霊の働きは、預言者エゼキエルが、離散の地バビロンにいたのに、エルサレムに運ばれて、その神殿で人々が偶像を拜んでいる姿を見させられました。そしてまた、離散の地に御霊によって戻ってきます。

このことはすごいことですが、もう一つすごいのは、宦官の喜びです。自分が水から上がったら、なんとピリポが跡形もいなくなっているのです。けれども、彼は真理を知ることのできた喜び、救いの喜びでいっぱいになっていたのです。使徒の働きには、主の働きがなされている中で大いなる喜びがあることを記録しています。主が約束されましたね、「ヨハ 15:10-11 わたしがわたしの父の戒めを守って、父の愛にとどまっているのと同じように、あなたがたもわたしの戒めを守るなら、わたしの愛にとどまっているのです。わたしの喜びがあなたがたのうちに入り、あなたがたが喜びで満ちあふれるようになるために、わたしはこれらのことをあなたがたに話しました。」

5A 伝道者ピリポ 40

40 それからピリポはアゾトに現れた。そして、すべての町を歩いて福音を宣べ伝え、カイサリアに行った。

御霊によって、ガザへの道からアゾトに移されました。アゾトは旧約時代のアシュドデです。今のイスラエルは、そのまま古代の町の名前、アシュドデを使って住んでいます。30 ^{キロメートル}そのまま海岸沿いに北に行くとアゾトに着きます。そして、そこからさらに北上します。グーグルで単純に計算すると、98 ^{キロメートル}、徒歩で 20 時間ぐらいかかるところです。けれども、はるかにもっとかかったことでしょう。すべての町を歩いて福音を宣べ伝えながら、北上していたのです。このようにして、ピリポは、福音を伝える人、伝道者となりました。

カイサリアは、ローマのユダヤ属州の首都です。彼はそこに定住し、娘も生まれます。ここで、ペテロが後に来て、コルネリウスの家族を信仰に導きます。そしてさらにずっと後に、回心したパウロがアジアやギリシアでの宣教の旅を三度行った後にエルサレムに向かう時に、カイサリアでピリポに会っています。21 章 8-9 節です、「21:8 翌日そこを出発して、カイサリアに着くと、あの七人の一人である伝道者ピリポの家に行き、そこに滞在した。この人には、預言をする未婚の娘が四人いた。」ピリポが、「あの七人の一人である伝道者ピリポ」と呼ばれています。イエス様の福音を伝える者として、召命を受け、賜物を受けていました。

私たちは、伝道者としての召命や賜物は受けていないのかもしれませんが。けれども、キリストの弟子であれば、素直に、福音を宣べ伝えるように召されています。復活された私たちの主は言われました、「マルコ 16:15 全世界に出て行き、すべての造られた者に福音を宣べ伝えなさい。」福音を伝えましょう。そのために、御霊に導かれて、信仰に満たされましょう。聖書のどこからでも、イエス様を語ることができるようにしましょう。信じてバプテスマを受ける単純な行動を促しましょう。